

特集

「最期は家で」の 希望をかなえる

在宅看取りの意思を支えるために、
病院ができること

現在、国民の6割が終末期の療養場所として自宅を希望しながらも、病院で最期を迎える人が8割を占めている。本格的な多死社会に移行しつつある中で、「最期は家で」の希望をかなえるために病院看護部がすべきこととは何か。また支障となっていることは何か。

「住み慣れた場所への退院と在宅看取り」を推進していくためには、「誰と組むか」が重要との声も聴く。つまり医療者間のパートナーシップ、信頼に基づく連携が前提となる。

本特集では、在宅看取りの推進における病院側の課題を整理するとともに、地域・在宅に携わる医療者からの事例の共有や提言を基に、地域全体で「最期は家で」の希望をかなえ、在宅看取りを推進する方法を考察する。